

## 中京大学英米文化・文学会講演会報告

### 春季大会

音響デザイナー・コンコーディア大学講師 イアン・クック氏

"Sound Design: Making Sense of the World through Sound"

2005年6月7日（火）、中京大学英米文化・文学会春季大会特別講演会が、センタービルヤマテホールにて開催された。以下に講演の要旨を記す。

講師のイアン・クック氏は、カナダのコンコーディア大学の講師を務めるかたわら、長年にわたって音響デザイナーとして、音響関係の仕事に携わっている。これまで映画や実験的映像表現の製作に携わったり、ラジオ番組のプロデュースを行ったりしている。また最近では、インタラクティブメディアにおける音響デザインも手がけている。今回の講演は、視聴覚教育における音響デザインの重要性について論じた、学術的にも意義深いものであった。

氏によれば、音響デザインとは、聴覚と音との関わりを通じて、認識世界の再構築を試みる行為である。日常生活では通常視覚情報が重視されがちのため、余り省みられれうことがないが、映画の効果音やBGMの例に見られるように、音は我々の理解や解釈を支える重要な要素である。氏が特に重要視するのは、コミュニケーションモデルにおける音とその聴取者との関係であり、氏はその両者が

置かれる文化的・社会的文脈が、音に対する我々の理解を決定する重要な要素であることを指摘した。また、我々の認識や理解は基本的に視覚重視型であるために、解釈行為において音声を持つ影響力が過小評価されていることを取り上げ、視覚中心的な世界認識とは異なる、音声依存的な認識のあり方の可能性が提起された。併せて、こうした認識の実践を通じて、聴覚を身体感覚の重要な要素として再認識する必要性が強調された。

当日は教員、学部生及び学外からの聴講者を含めて 90 有余名の参加者があり、フロアからも活発な質疑応答がなされ、講演会は盛会のうちに幕を閉じた。

(国際英語学部助教授 森 有礼)

